論　文

当事者実践からボトムアップ理論を創る

―M-GTA のスーパービジョンの経験を通して―

眞　砂　照　美
滝　沢　由紀子

〔抄　録〕

社会福祉における研究とは何か，そして研究者は誰に向けて行うのかという問いがある。

M-GTA は，人と人との相互作用から，データに密着した理論を生成する研究法である。本稿では，筆者（眞砂）の M-GTA のスーパービジョンの経験を加えて，M-GTA を用いた社会福祉実践に関する研究を行う際に必要な事柄について，M-GTA における「研究する人間」という考え方を軸に検討した。

M-GTA で通常用いられるインタビューの語りとは別に，社会福祉の研究では当事者や家族の手記，当事者団体の機関誌などがあり，これらには，社会福祉が取り組むべきテーマであることが多い。そこで，後半部分では，知的障害者福祉施設創始者の伝記などを用いて M-GTA 手法を援用して鍵概念を生成し，鍵概念から当事者家族の手記の分析を行った滝沢が研究事例を紹介する。

この研究事例について，文献データの分析に加え，手記という主観のデータの分析について M-GTA の主観と客観の関係で検討を試みた。

これらのことから，当事者や家族の実践である質的データについて「主観客観の往還」を絶えず行いながら，「研究する人間」を基軸に研究法としての M-GTA の考え方に沿って丁寧に分析を行っていくことにより，社会福祉実践についてのボトムアップ理論を創りだすことの可能性について提案した。

キーワード：M-GTA，理論的サンプリング，研究する人間，主観客観の往還，手記

本論文の構成では，4. 福祉施設創始者の歴史と現代の当事者家族の手記を結ぶ質的研究の事例を筆者の滝沢由紀子が担当し，残りの１～３及び５と６を筆者の眞砂照美が担当した。

1. 問題の所在と研究の背景

社会福祉学を学んでいるとき「今あなたが苦しみながらたくわえている力を，明日それを必要としている人のためにお使いください」(1)との言葉に出会った。社会福祉を学ぶ学生への言葉であったが，社会福祉学の研究につながる重要な意味があると考えた。

社会福祉学の研究にとどまらないが，質的研究を用いた研究事例が急増している。様々な質的研究の方法論が開発されてそれらの分析方法が詳細に提示されたこともその要因の一つであろう。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を用いた研究例も同様である。NII 学術情報ナビゲータ（CiNii　Research）のサイトから，「M-GTA」のキーワードで検索したところ 1167 件が，「福祉」と「M-GTA」のキーワードで検索すると 142 件がヒットした。ところが，M-GTA と銘打っていても M-GTA の目指す方向とはかけ離れた研究例も散見する。

M-GTA は，質的研究法である GTA（オリジナル版）の課題を克服する形で，1990 年代に木下康仁が修正して提案したものである。ところが，昨今の M-GTA を用いた論文の中には，M-GTA と GTA との混同があったり，M-GTA の方法を正しく理解せず，1 事例のみの分析をしたり，異なった手順で分析したり，質的データを切片化して分析したり，又はコンピュータによる分析が提案されたりという，M-GTA を研究法として選択する研究者を取り巻く混乱した状況が散見されるようになった。

社会福祉学の領域では，M-GTA が得意とする対人援助のプロセスを明らかにしようとする研究が多くみられる。複雑で多様な関係の中にある当事者と支援者，それを取り巻く環境の中で，当事者と支援者の間のプロセスを説明することが出来る。分析テーマと分析焦点者という限定した範囲を設定しながら分析していくこの研究法は，当事者や支援者などの実践の場から提案され，応用可能性をもつ理論となり得る。ところが，分析結果までの提案にとどまり，その後の応用可能な理論やその検証までの研究への方向性まで言及しているものは少ない。

当事者や支援者の深い語りのデータがあっても，結果図やストーリーラインの分析結果だけの提示というものやデータ数の少なさを理由に研究の限界を述べる程度にとどまっているものも少なくない。これでは，M-GTA の研究法としての本来の目的が十分に果たされているとはいいがたいのではないかと考える。

一方，当事者や家族の手記，当事者団体の機関誌等の中で表出されるのは，個人の固有の問題にとどまらず，社会福祉が取り組むべきマクロソーシャルワークの課題であることも多い。そこには，研究者が知り得ない体験や当事者の思いが多く詰まっている。しかしながら，そう

した貴重な体験談の多くは身近な人に向けて配布される私家本であり，また一定期間の経過後廃棄される機関誌や会報等である。手記や機関誌などを質的データとして分析し，実践への応用とするという研究については，研究の蓄積が見られない。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は，社会福祉学で重要と考えられる当事者の手記など質的データの分析にM-GTAの主観客観のたえざる往還を通して行っていくことで実践のボトムアップ理論を生成する可能性について提案することである。本研究では，次の二つの方法を行う。一つ目は，社会福祉実践に関するM-GTAによる研究を行う場合に必要な事柄について，M-GTAにおける「研究する人間」という考え方を軸に検討を行うことである。M-GTAでの研究を行う際の基本的な考え方を取り上げ，M-GTAの分析で欠くことができない重要なことがらについて，筆者（眞砂）のM-GTAのスーパービジョン（以下SV）の経験(2)を通して考察する。

二つ目は，M-GTAの手法を用いて鍵概念を生成し，その鍵概念をもとに当事者家族の手記データを分析した研究事例を紹介し，文献データをM-GTAで分析すること，並びに手記という主観のデータの分析について，研究する人間の主観客観の関係について検討を加える。

3. 社会福祉のテーマを「研究する人間」の視点でM-GTA研究法を用いて分析する

本稿では，開発者である木下のM-GTAに関する文献及び山崎の文献(3)から基本的用語を取り上げ，中でも「研究する人間」という考え方を軸にしながら，社会福祉の研究でM-GTAを用いた社会福祉の研究で欠くことのできない事柄について考察していく。「研究する人間」とは，「研究者を主題化するM-GTAの基軸の考え方であり，誰が何を目的にその研究を行なうのかに関する倫理面と，データの意味の解釈をどのように行なうのかの分析方法論から研究者を位置づける」（木下2020：59）ことである。

「M-GTAでは，研究者を【研究する人間】という概念を用いて，研究者を方法論化し，社会的関係にロック（lock）する」（木下2020：36）。このことは，研究者の分析における価値を制御して組み込むために必要な方法（木下ら2017）(4)と考える。さらに，M-GTAでは「調査協力者→分析焦点者→結果の応用者」という異なる他者との間で，研究者が3種類の関係的人間を経験するという相互性を積極的に分析方法に組み込むことで，質的研究の可能性を実現しようとする」（木下2020：42）のである。

3-1　研究する人間の立ち位置との関係でM-GTAを選択する理由が必要である

GTAは1965年にGlazer B.とStrauss A.によって提唱された質的研究法(5)である。このオリ

ジナル版から1990年代初めの両者の対立を経て，現在は様々な立場のGTAが存在する。

しかし，M-GTAを用いた研究でも，M-GTAを選択する理由について明確にしていないという問題が生じることが多い。分析しやすそうだからM-GTAありきで研究を始めるという研究者もある。研究のテーマを着想した段階で，質的研究か量的研究か，あるいは混合法か，研究目的に合致した研究方法を検討して決定するのが通常であるが，その検討を行わないままM-GTAを選択してしまう。論文にはプロセスの研究であるからM-GTAを選択したと述べるにとどまっている。このことは研究の結果や結論，研究の応用までを左右する重要な点である。

もう一つの問題は，GTAのオリジナル版からCharmazのGTAまで異なる認識論があり(6)，研究者の立ち位置を無視してGTAを選択してしまっているということである。

誤解を恐れずにいうと，例えば，CharmazのGTAは「社会構成主義にシフトし，理論生成の目的をも放棄するに至っている（木下2020：38）」と考えると，理論生成を目指していたはずの研究者が，GTAの選択を誤ったために，研究の枠組み自体にバランスを欠き，研究目的と研究結果が矛盾するという事態にもなりかねない。CharmazのGTA(7)はそれまでのGTAの客観主義を否定しながら，一文ずつ厳格に区切っていく分析スタイル（切片化）を採用してしまったことで，社会構成主義の立場との矛盾も生じている。研究当初の段階から，研究者の自分はどの立ち位置で，何を目指していくのか，ということを念頭におく必要がある。

先に述べたように，M-GTA以外のGTAでは，インタビューデータから一文一文を区切って切片化するが，M-GTAでは，切片化せず文脈のまとまりのデータでの分析を行う。これはM-GTAが特にこだわっている部分である。切片化してしまうと，どうしても分析ではなく，同じものの集まりとしてコードに当てはめる演繹的な作業となる。しかし，文脈からの分析(8)によらなければデータに密着した理論（グラウンデッド・セオリー）を生成することは難しい。切片化されたデータは静止したコードに割り当てられ，生きた人間の複雑な動きの相互作用が全く感じられない無機質なものとなってしまう。

質的データの深い解釈を行った分析の結果，当然厚みのある記述が生まれていく。そこには必ず何らかの動きや変容，変化が生じているのである。例えば，当事者の語りを一文ごとに区切ってしまえば，なぜその人がそれを語り，その人がどのように考えて，どのように選択し，どう行動したのか，全く分からなくなってしまう。研究には科学性，客観性が必須と声高に唱えてみても，当事者へ繋がる福祉の研究者がそうした貴重な語りを合理的に切ることは難しい。

とはいえ，M-GTAでは当事者の言葉をそのまま分析対象とするのでもない。これについては，分析焦点者の設定の所で説明する。

3-2　研究する人間としてM-GTAの研究全体を通して理論的サンプリングを行う

M-GTAでは，研究計画の当初から分析全体を通して理論的サンプリングが行われる。

社会福祉の研究を行う際に，調査協力者をどのようにサンプリングするかということも大き

な点である。

例えば，ヤングケアラーの支援を研究テーマとする場合，ヤングケアラーに焦点をあてるのか，それともケアラーの支援についてあきらかにしたいのかでは，調査対象者が異なる。もちろん両者は相互作用の関係にあるため切り離すことはできないが，支援者を調査協力者とした場合，その人の経験の範囲内の語りとなる。ヤングケアラーの支援が十分といえない現状の中では，やはりヤングケアラー自身に語ってもらうことが優先される。この時点の理論的サンプリングは，研究結果やその応用に大きくかかわるということである。研究者はとかく調査のしやすさを考えがちであるが，明らかにしたいことを明確にして調査協力者を募集していく。

M-GTAを分析方法として選択し，質的データの逐語記録から最初にどの調査協力者から分析をし始めるかというところも理論的サンプリングである。全体の逐語記録が揃った段階で，分析を始めるというところもM-GTAの特徴である。

しかし，M-GTAを学び始めたばかりの研究者は一人のインタビューを終えるとすぐに分析したいという思いに駆られる。この場合，概念が先にできてしまい，どうしても後のインタビューがそれらの概念をキーワードとした調査面接となってしまう。M-GTAでは1人のインタビューを終えて，分析して，追加するということはしない。木下は，研究会などで一度きりのインタビューを一期一会として大事にしてほしいと述べている。木下のいう，まさに真剣勝負のインタビューとなる。調査協力者の数も理論的サンプリングに基づくものとなる。

また，最初に選択する調査協力者のデータのどの部分に着目するかということも理論的サンプリングである。データのどこから始めるか，どこを選択し，どこまで切り取るか，研究する人間にその判断が求められる。そして，分析ワークシートを用いた概念の生成，カテゴリーの生成，結果図に至るまで研究の全体を通して理論的サンプリングは続いていく。

3-3　研究する人間としてどのようにインタビューを行うのか

社会福祉に関する研究テーマの場合，自分が関わっており，よく知っている当事者や支援者が調査協力者となる場合が多い。かかわりの深い関係者に調査依頼をする場合，その人の状況をよく知っているために，思いがけず研究者の主観的な質問になってしまうことがある。調査協力者が当事者の場合には，よく知っているからこそ安心して調査が行えるのかもしれないが，そういう信頼関係のある人が同席して，別の第三者が聞き手になってインタビュー調査をする方法も考えられる。この場合の第三者は人を対象とする研究倫理の申請時に明記しておくなども必要であろう。調査協力者の最初の人が決まれば，あとは機縁法を用いて紹介してもらうという方法も有効である。

研究の問い（リサーチクエスチョン）は前提となるが，研究者によっては，「この仮説を明らかにしたい」と言われることがある。しかし，M-GTAは仮説検証型の研究法ではない。質的データを取ってみて，初めて分かることもあるし，むしろ研究者が予想もしなかった語りが

得られることも多い。このことから, M-GTAでは半構造的面接を用いて質的データを収集する。

M-GTAのインタビューを行う前に，インタビューガイドを作成するが，これも詳細に質問項目を考えるのではなく，この研究のために欠かせない項目の大枠を決めておき，後は自由に語ってもらうというスタイルの調査になる。そうしなければ深い語りが得られないからである。質問紙の項目について聞く構造化面接によって得られた質的データをM-GTAで分析することは難しい。深い語りがなされなければ，深い解釈も得られないからであり，これは，先に説明した切片化しないということとも関係してくるのである。

社会福祉の実践経験がある研究者にはインタビューを用いた調査は理解しやすいと思うが，アセスメントを意識した聞き方になってしまわないように留意する必要がある。逐語記録を見せていただくと調査協力者の言動を評価したり，こういうことじゃないですかなどと聞き手の主観的な聞き方になっていることが多く，その場合，調査協力者の「そうですね」という語りが多くなり，調査対象者の深い語りが聞けないということにもなってしまう。

当然，クライエントを励ますような技法は用いず，知ってはいても，初めて聞くという姿勢が重要である。あくまでも，目の前におられるのはソーシャルワーカーの所に相談に来られているクライエントではなく, 調査協力者であることに留意する。文字起こしのためにICリコーダーで録音することも多いが，インタビューの際，当事者などの個人情報保護の観点から，予めAさん，Bさんという呼び名か，仮名を使うことを決めておくとよい。そうすると，文字起こしをする際にも本人が特定されにくいということになる。

3-4　研究する人間としての「分析焦点者」の決定と「分析テーマ」の絞り込み

M-GTAでは,「研究する人間」としての立ち位置を明確にして分析する。このために，一旦インタビューの語りを逐語記録にし「データのまとまり」として研究者との距離を取るのである。分析する時には，調査協力者としてではなく，分析焦点者を設定して行う。

時々査読などで指摘される, Aさん, Cさんは語っているけれど, Oさんは語っていないのに，その概念は成立するのか，という点である。「分析焦点者という，自分とは違うもう一つの視点に本当に徹して，意味を考えていく」（木下ら2017）[9]のである。M-GTAでは調査協力者イコール分析焦点者としていないのは，応用可能性のためでもある。もし，分析焦点者を就労支援事業所X施設の利用者と設定した場合，その結果は，X施設という範囲に限定されたものであり，他の類似の施設に応用することが難しくなる。一方で，X施設の利用者ではなく，就労支援事業所を利用している利用者というまとまりの集団と設定すれば，例えX施設の利用者からのデータであっても，この結果から得られる理論には他の就労支援事業所での利用者への応用が可能となる。分析焦点者の設定ではどんな人に応用してほしいか，ということについて研究当初から考えておくことが重要である。

M-GTAで設定する分析テーマは研究テーマとは異なる。というのは，分析テーマは，逐語

記録の質的データが揃って分析する時点で改めて絞り込んで決定することになるからである。調査協力者全員のインタビューデータが逐語記録化され手元にある段階であり，音声データなどを逐語記録にする時点で何回もそのデータに触れていることから，研究者には全体にどのようなことが語られているか分かるのである。この時に，何をどこまで明らかにしていくのかという分析テーマが必要である。当初の研究テーマのような広いテーマではなく，より限定された範囲の分析テーマを設定することになる。インタビュー前に考えていたり，予想していたこととは違って新たな発見が沢山データには含まれていたりする。そのデータから複雑な相互作用や変化のプロセスが起こっているのかという目途を付けていくのである。

分析テーマと分析焦点者の設定により意味のあるまとまりに着目して分析が行われ，分析焦点者が主語になる概念名が生成されていく。完成した結果図やストーリーラインもこの分析テーマと分析焦点者との関係が矛盾なく提示されていくはずである。質的データが揃った段階で，分析テーマの絞り込みと決定を行い，分析焦点者の設定をしていく。インタビューを行い，とても重要な語りが得られ，自分の思っていたこととつながったりすると，すぐに分析を始めたいという思いに駆られる。ところが，この二つの設定を行わずに分析すると研究者主導の主観的な分析となり，誰についての何のプロセスを明らかにしたいのかということが途中で分からなくなってしまうのである。

また，分析テーマで分析を始めたが，あまり分析が進まないということも生じる。その場合には，分析テーマからやり直す。回り道をするようであるが，分析が滞ってしまうとか，具体例（バリエーション）はあっても定義や概念に結び付かない，あるいは概念が沢山出来てしまうといった状況を生んでしまうことを避けることができる。研究が進んでしまってから，ある程度概念が生成された段階で，何かしっくりこないという思いにかられてしまうことになると，スーパーバイザーは，もう一度やり直しましょうと研究者に伝えることに躊躇してしまう。研究が進む前にそれを避けたいのである。

ここまでが，データを分析する前の段階でとても重要となる。

3-5　分析ワークシートを用いて概念を生成すること

よく間違うのが，分析ワークシートの手順である。図1に示されているように，分析テーマと分析焦点者に基づき，逐語データから具体例（まとまり）に着目する。取り上げた具体例の意味を考え短い文章でその定義を定義欄に入れる。定義は「○○すること」という動きのある体言止めにする方が分かりやすい。M-GTAを用いた研究を初めて行う場合は，分析ワークシートを用いた分析のこの手順を誤りやすい。語りから最初に概念名をつくり，その意味を書き入れて，その後に概念名から該当する部分を語りのデータから記入するという順序ではないことに留意する。分析ワークシートの上部に分析テーマと分析焦点者を明記すると分析がぶれない。誰の（分析焦点者）の（分析テーマについての）どんなプロセスに着目しているのか確認できる。

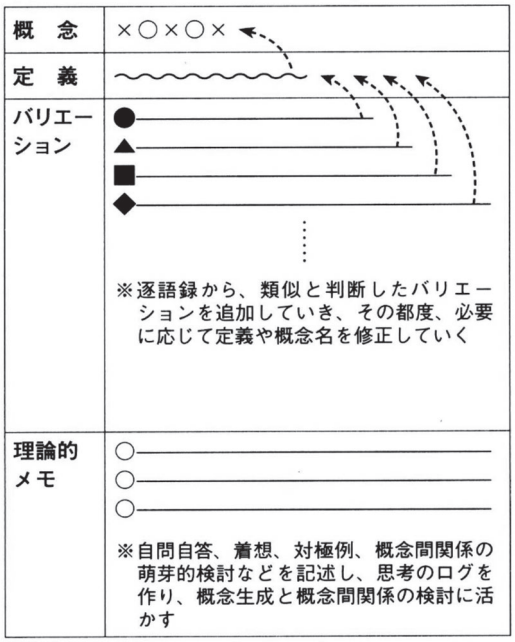

図１　分析ワークシート（山崎 2019:113 図１から転載）

筆者の研究「てんかん相談におけるワーカー・クライエントの双方向エンパワメント」[10]では，てんかんのある人の受診の様子についての語りのバリエーションに着目し，「短い診療時間の中で発作の申告と薬の増加の繰り返し（パターン化）からクライエントの医療への信頼感が失われていくことという定義を設定した。この定義に基づき「処方パターン化による医療不信」という概念が生成された。また，家族との関係についての語りから「発作があるために，成人であっても家族の目が行き届く範囲の中で生活しているということ」という定義から，概念「家族のテリトリーで生活」が生成された。生成された概念は，筆者の研究当初の「相談を望んでいるにも関わらず，てんかんのある人が医療ソーシャルワーカーの相談室を訪れないのか？」というリサーチクエスチョンにつながる概念となった。

私自身がこの研究の SV[11]を受けて指摘されたのが理論的メモの扱いである。自分でどのようにこの概念が生成されたのか，きちんと説明ができなければいけない。理論的メモは，後述する理論的メモノートの活用とともに研究する人間の「思考と感覚のログ」（山崎 2011）[12]となる。分析ワークシートはあくまで分析用のツールであり，投稿論文などでは紙面の関係上ほとんど提示されることがない。どのように分析したかが分かりにくいため，査読者を悩ませることになる。だからこそ，丁寧に分析ワークシートを立ち上げ，概念を生成し，理論的メモを作って分析を行って確信を持つことが必要なのである。

3-6　研究する人間のための理論的メモノートの活用

理論的メモノートとは，分析ワークシートの理論的メモには書ききれない，研究全体を通しての着想や，概念間の関係や概念図，カテゴリーの生成，先行研究との関係など，研究者が M-GTA を用いて研究する際の思考などを書き留めておくものである。概念間の関係をみていくと，当然分析ワークシートの範囲を飛び出てしまうことが生じる。例えば，概念の統合や廃止，概念名の修正やカテゴリーへの変更等など，分析を行ってから考えなければいけないことがどうしても生じてくる。そのような時にこのメモノートの活用は便利である。これは，論文

を書く時にも非常に役立つものとなる。もちろん，この理論的メモノートは，研究計画の当初から「思考と感覚のログ」として，日記のように日時を記入してつけていく。したがって，分析の順番と一致しない場合も多く，思考が行きつ戻りつする。

筆者の経験では，最初に図やイラストも入れて手書きで作り，後にデータ化した。理論的メモノートには結果図の案だけではなく，分析に関わる小さなプロセスの概念図や大まかな構想，先行研究との関係では，ブーバーやロジャーズの援助関係についての図などを入れた。ただ，この時は，具体的な日時を入れておらず，どの時点だったか判明しないという反省はあったが，この理論的メモノートに書いたことで今でも研究をする上で参考になることが多い。SVの質問やグループディスカッション，研究発表の際にも十分活用できる。

3-7　研究する人間の継続比較分析と理論的飽和化の判断

継続比較分析とは，文字通り比較の繰り返しを絶えず行っていくという意味である。一つの概念が生成されても，それを定義との関係で具体例を探していく。この作業もまた継続的に行う。概念と概念との比較や別の概念を統合したり，廃止したりすることにおいても継続的に行う。また，カテゴリーの生成の際も同様である。M-GTAではこの作業を丁寧に行っていく事で，解釈の確かさが担保される。

木下は，「データからの概念生成の完成度を判断する『小さな理論的飽和化』を分析ワークシートの結果に基づいて行ない，分析結果全体に対しては『大きな理論的飽和化』を，分析テーマに対する結果図とストーリーラインによって行なう」（木下2020：55）と，M-GTAでは2段階の理論的飽和化を提案している。M-GTAでは，『大きな理論的飽和化』の前に，『小さな理論的飽和化』を概念の数だけ生成している（木下2003：220-224）のであり，理論的飽和化においても，研究者として分析全体を通じて「研究する人間」の視点で行っているのである。

3-8　研究する人間としてカテゴリーの生成を加え結果図とストーリーラインでモデルを示す

カテゴリーの生成は分析の要となる。概念が生成された時点では，概念はバラバラに置かれている状態である。個々の概念について他の概念との関係を検討していく。これを継続して行っていくと，複数の概念の関係からなるカテゴリーが浮上してくる。カテゴリーの検討では，概念と概念の関係を図にしていくと考えやすいので，これは先ほど述べた理論的メモノートの概念図等考えていくと分かりやすい。また，カテゴリーは，結果の理論を構成する柱建てとなる。また，概念生成以上に強力な説明力と命名が必要である。そのため，カテゴリーの生成には分類型思考ではなく，生成型思考が求められる（木下2020：162）。

分析を理論にまとめていく考え方と具体的方法が結果図とストーリーラインで示されるため，結果図とストーリーラインは理論としての完成度を示すものとなる。自分自身の研究もそうであるが，SVの際に結果図とストーリーラインが分析結果と符合しないということが見受

けられる。分析を結果図にするのは簡単なことではない。何度も結果図を作り直すということを試みながら，やっとなんとか完成するということが多い。しかし，簡単にはできないということの意味があるのである。読み手が納得できるようなところまで分析結果を結果図に落とし込めていないのである。また，結果図とストーリーラインは一致しているものであるので，結果図を見ながらストーリーラインを読んでみて，しっくりこない場合には両者を再検討する必要がある。

3-9　研究する人間から実践の応用と検証する人への橋渡し「結果の実践的応用」

筆者の研究を読んで，てんかんのあるお子さんのお母さんが大変納得できるということを伝えてくださった。自分自身の研究がその当事者の方に納得できる，理解できると評価される。反対に，研究結果に首を傾げられるとか，ピンとこない，分かりにくいという評価もあり得るわけである。M-GTA の研究ではこの実践者による応用のために，そうした批判や疑問に対して常にオープンにしておく。そのようにしてモデルとしての精度を挙げていく研究法なのである。福祉学の研究が誰に向けて行われているのかということを考えると，このデータに密着した理論が当事者の現場で応用され，検証されていく事が望ましいのである。

4.　福祉施設創始者の歴史と現代の当事者家族の手記を結ぶ質的研究事例

滝沢由紀子「黎明期の知的障害者施設創設者の鍵概念を用いた当事者家族の手記の分析」

本研究事例は，滝沢が 2016 年度広島国際大学医療・福祉科学研究科医療福祉学専攻に提出した修士論文「黎明期の知的障害者福祉の史的考察と今後の在り方に関する研究－当事者家族の手記の分析を通じて－」（指導教員　眞砂照美）を加筆修正したものである。

4-1　研究の背景

糸賀は，パール・バックが知的障害者の娘との体験を表した『母よ嘆く勿れ』を取り上げ，「深く澄んだ心境で，障害のあるわが子のゆえに親も子も救われ，そこからさらに魂の新奥に人生の意味を探求していくみちゆきは，決して一個人の満足にとどまらせないで，必ず社会への働きかけの姿をとる。（中略）この子らの立派な生き方を示すことによって，社会の人びとにこの子らのことを考えさせるようにしたとするならば，それはたいへんな大事業なのである」（1968:37）[13]と述べ，こうした経験を後世に残していくことの重要性を指摘している。

中嶌（2013）[14]も，「社会福祉実践は，日々新たな問題に直面し，あるいは利用者を前に新しいことに挑戦していかなければならないことはいうまでもない。しかし，そうした新たな問題への対処方法や新規事業のヒントは，目先の結果に一喜一憂する研究ではなく，歴史のなかに見つかる場合も多いはずである。加えて，原点研究という物事の根幹や本質にアプローチし

ようとする視点を持つことも重要である」と述べているように，本研究の歴史研究と現代の手記を結びつける試みも意味を成すと考えられる。

4-2　研究の目的と意義

本研究では，日本の知的障害者の福祉事業史，特に黎明期を中心に辿り，知的障害者福祉の創始者の思想と実践，そして深い人間愛に至る思想の醸成の過程に通底する鍵概念を抽出し，当事者の家族の手記を分析していく。この分析を通して，黎明期の知的障害者福祉の創始者から現代の当事者家族の支援に繋がる福祉実践の知見を得る。知的障害のある当事者にとって，好ましい生き方とは何かを問うことで，今後の知的障害者福祉や支援のあり方についての示唆を得ることができる。

4-3　文献データから鍵概念を生成し，鍵概念を用いて手記データを分析する。

①文献データから鍵概念を生成する

鍵概念を生成する文献データは，日本知的障害者福祉協会編『天地を拓く』[15]から5名の知的障害者福祉施設の創始者，石井亮一，川田貞治郎，三田谷啓，田中正雄，菅修を取り上げ[16]，人物伝や関係する文献などから意味のあるまとまりのデータ（文献データ）とする。この5名のデータのまとまりごとに解釈を行い，鍵概念（キーコンセプト）を生成する（表1）。

表1：文脈データから鍵概念の生成

（文献）の著者	＜創始者名＞文献データ	頁	鍵概念名
津曲裕次	＜石井亮一＞明治29年，アメリカにわたり，10か月に及ぶ研究と実地研修を行った。ここでは，E.セガンの生理的教育法と小規模寄宿学校の長所を学ぶ。	16	鍵概念名5＜福祉実践への科学的探究心＞

②　鍵概念を用いた当事者家族の手記（手記データ）を分析する。

論文で用いる当事者家族の手記は，なすすべがないと思われていた対象者（長男）と指導者（母親）の記録として滝沢由紀子によってまとめられた1990年～2000年までの記録の3つの手記（私家本）である。分析用に，手記1：『母と子の響き合い』，手記2：『雨からも風からも－地を継ぐものの記録－』，手記3：『母と子の響き合いパートⅡ』と表記する。①で生成された鍵概念をもとに，手記データから当てはまる記述の箇所を抽出して記入する（表2）。

表２：鍵概念を用いた手記データの分析

手記名	手記データ	頁	鍵概念
母と子の響き合い	療育について １）四季の移り変わりを肌で感じるように。言葉で伝えることは難しくても，自然の中に身を置くことによって，わかってくる。 2）薄着で，変化がすぐに皮膚への刺激となるように。 ３）気候によって，衣服や道具が変わっていく。こだわりの強い長男には変化の揺さぶりが必要である。	6	鍵概念６＜自然の中で生きる＞

4-4　研究の結果と考察

本研究では，二つの分析を用いた。まずは，創始者の優れた実践の歴史をたどり，当事者の置かれた時，所，意味を確認するという分析である。まずは，黎明期の知的障害者福祉施設を創始した先覚者の人と福祉の思想について意味のあるまとまりとして抽出し「文献データ」とし，M-GTA の手法を援用して分析した結果，16 の鍵概念，と５つのカテゴリー（コアカテゴリーを含む）が生成された。この概念とカテゴリーにより，黎明期の知的障害者福祉施設の創始者が当事者尊厳の福祉を展開していくプロセスを明らかにした（結果図及びストーリーライン）。

〔16 の鍵概念〕

鍵概念１＜好きな人，好きな場所，好きな仕事＞

鍵概念２＜体験から形成される生活スキル＞

鍵概念３＜営為の通奏低音＞→コアカテゴリーへ

この概念名は，田ケ谷（2013:231）[17]による菅修についての記述から引用したものである。通奏低音とは，「常に底流としてある考えや主張のたとえ」（大辞泉）[18]である。M-GTA による分析結果，研究の核となると判断し，概念からコアカテゴリーに変更した。

鍵概念４＜信仰に裏打ちされた人間愛＞

鍵概念５＜福祉実践への科学的探究心＞→カテゴリーへ

鍵概念６＜自然の中で生きる＞

鍵概念７＜家族的・家庭的の重視＞

鍵概念８＜試練との闘い＞

鍵概念９＜当事者との共生を選択＞→カテゴリーへ

鍵概念 10＜協力者との出会い＞

鍵概念 11＜辛抱強い取り組みの実践＞

鍵概念 12＜劣等処遇への憤り＞

鍵概念 13＜当事者尊厳の人間観＞

鍵概念 14＜全人的ケアの実践＞→カテゴリーへ

鍵概念15＜自立を目指した支援＞

鍵概念16＜先覚者に学ぶ＞

尚，図2（結果図）では，カテゴリーは【】で括って示す。概念からカテゴリーに移行したものや新たにカテゴリーを生成したものもあり，当初生成された鍵概念の数とは一致しない。

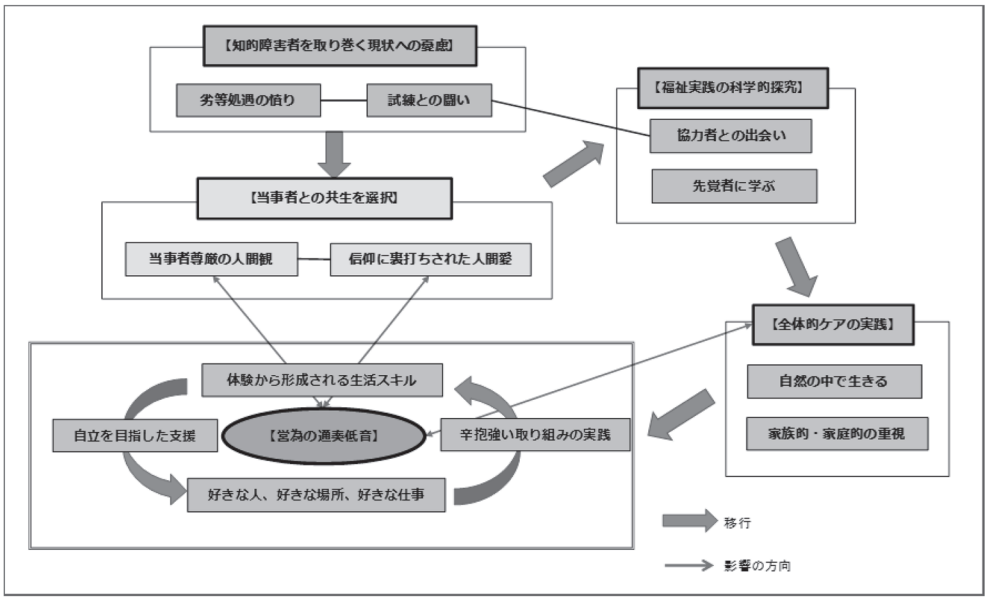

図２　黎明期の知的障害者福祉の創始者が当事者尊厳の事業を展開していくプロセス

ストーリーライン：「黎明期の知的障害者福祉施設の創始者が当事者尊厳の福祉を展開していくプロセス」（カテゴリーを【】で，鍵概念を＜＞で表記）

黎明期の【知的障害者を取り巻く社会】には，知的障害者を社会の不要なものと扱い，人権を無視し，その他の人と＜比べて劣等処遇＞するなどの【憂慮すべき状況】があった。知的障害者福祉事業の創始者たちは，絶えず＜試練との闘い＞の中で，＜協力者の存在＞を得て，【当事者との共生を選択】し，福祉事業を発足させる。彼らには，＜当事者尊厳の人間観＞があり，キリスト教や佛教の＜信仰に裏打ちされた人間愛＞があった。しかし，当時の日本の状況は知的障害者に対する偏見や誤解，無理解が渦巻いていた。そこで，知的障害者も同じ人間と考える彼らは，【福祉実践への科学的探究心】を携え，石井亮一や川田貞治郎はアメリカに学び，また田中正雄らは欧米の思想を学んだ石井ら＜先覚者に学ぶ＞という謙虚な姿勢を持ち続けていた。欧米の知的障害者福祉の思想を受け継いだ彼らは，知的障害者には＜自然の中で生きる＞ことや，＜家族的・家庭的な環境がよい＞ことを知り，【全人的ケアの実践】をする。知的障害者に対する実践では，知的障害者の＜好きな人，好きな場所，好きな仕事＞を大事にしたからこそ，その【体験から生活スキルが形成】されていく。また，どんなに困難な課題にも＜

辛抱強く取り組んで＞いき，知的障害者の将来の＜自立を目指した支援＞を行っていった。知的障害者福祉の創始者たちの中にあったのは，【営為の通奏低音】であったのである。

次に，現代の知的障害者教育・福祉の理論，制度，実践に比して検討するため，この鍵概念に当事者家族の手記（滝沢手記）をあてはめていく作業を行ったところ，＜鍵概念５＞と＜鍵概念 12 ＞以外の 14 の鍵概念が滝沢手記に確認された。

4-5　結論及び今後に向けた課題

重度の知的障害を伴う自閉症の長男と 27 年間，毎日 24 時間を共に暮らした。はじめは全くどうしていいのかわからなかった。言葉の世界に住んでいる者と，言葉を持たず，知的障害の世界に住んでいる者，何を媒介にしてわかり合えばいいのだろう。

しかし，田ケ谷（2012:53）[19]の図３が示すように，発症の早い「小児自閉症」と「盲重複障害児」との障害の違いはあっても，基本的生活能力や行動性は訓練の適期が子どもの心身発達のごく初期にあり身につけるのが非常に困難であるが，学習能力や作業能力は未開拓ながらも発達可能であったのである。

考えてみると，言葉の世界に住んでいる者と，言葉を持たず，知的障害の世界に住んでいる者という，この異なる二つの世界に住んでいる者の間には，いつも自然があった。そして自然に包み込まれるようにして二つの世界は溶け合って行った。

黎明期の知的障害者福祉施設の創始者もこの異なる二つの世界を行き来し，様々に思い悩みながら，時には海外の先達に学び英知を加え，ともに生きあうことによってその世界を融合させていった。

「いばら路を整地せし人ここに居れば, いかに謝しせても謝し切れぬかは（河尾 2006:214）[20]」とあるように，創始者たちの実践は過去の歴史としてとどまるのではなく，現代の知的障害者福祉実践へと繋がっていくものである。黎明期の知的障害者福祉事業の創始者とは隔世の現代に生きる当事者家族の手記を分析に加えることによって，両者には知的障害児者をいつくしみ，その存在を対象化するのではなく，同じ生活者としてともに生きるという「営為の通奏低音」があったのである。

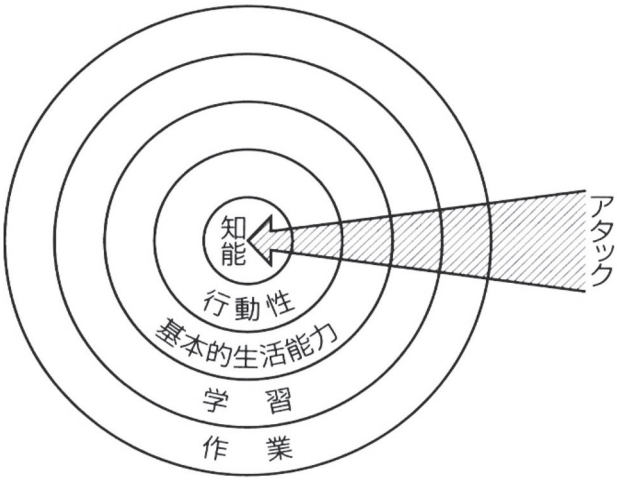

図３　盲重複障害児のパーソナリティへのアタック
（田ケ谷　2012:53 より転載）

日本の知的障害児教育・福祉の実践のあゆみを検証することは，現在の日本の知的障害者教育・福祉の理論，制度，実践を問い直すことである（津曲 2013：33）[21]。現代のこの時こそ，最も身近な存在である当事者家族による実践とその理論的裏付けとなる研究は知的障害者とその人に関わる人々にとって“一つの希望”となり，新しい道を拓いていく道標となるのである。

本研究では黎明期の創始者5名について鍵概念を生成したが，同時期の他の創始者についても分析を進めることで，より精度の高い鍵概念が得られると思われる。また，当事者や家族の手記などを加えることで，現代の豊かな実践のあり様から実践理論を検討することが可能となる。今後も可能な限りこのテーマに関心を持ち続けて研究していきたいと考える。

5. 考察

西尾らは，「社会福祉の発達は先覚者の秀徹した先見性と，血の滲むような辛苦の上に築かれてきた。その歴史の学習とは，福祉の先覚者と対話することである」（西尾ら 2018：6）[22]，と社会福祉における歴史学習の重要性を訴える。対話することで，その人となりや考えを理解することができる。例えば，六方学園創設者の田中正雄が当時の進駐軍の軍政の副部長であったドロシー・デッソーの施設名変更の提案に対して，六方という言葉にある宗教的かつ人道的に深遠な意味を解き続け，その申し出をきっぱりと断ったとのエピソードがある。田中にとっての「六方」の名称は万人を愛敬し，和合することによって現世に仏教的平等を実現しようとの願いを込めた言葉であった（村井 2013：183-184）[23]。

温厚な田中が当時の強制力を持った進駐軍に抗ってまで守ろうとしたのは，子どもたちは同じ家族であり共に生活する存在であり，その子への限りない敬愛と平等や人権の思想と絶えず福祉実現のために自己研鑽する姿勢ではなかっただろうか。滝沢の結果図と見事に符合する。

一方，名を成した人の人物伝とは異なり，当事者や家族による手記は多くが少部数の自費出版か私家本であり，後世の歴史書物として残ることがなく，そのままではやがて忘れ去られてしまう存在である。このような手記を対象とした分析を行っている研究[24]はあまり多くない。

滝沢の研究事例では，伝記と手記の分析を通して，知的障害者福祉施設の創始者の思いが，現代の当事者家族の思いと繋がっていたことを明らかにしている。

滝沢氏が，医療福祉学専攻の修士課程に入ってこられた時，手記を用いた修士論文を書きたいという希望があった。しかし，手記も私家本であり，書かれた本人がそれを分析する研究が果たして可能なのか考えた。自分を離れて自分を見ることは難しい。

そこで，黎明期の知的障害者福祉施設の創始者たちの人物伝や彼らに対する文献を可能な限り入手して，文献データとして意味のまとまりにし，この文献データをM-GTAの手法を用いて鍵概念を作り，そこから滝沢手記を分析することができるのではないかと提案した。

もちろん，これはM-GTAのインタビューから分析を行うという方法ではなく，手記を分析

するための鍵概念を生成するために文献データについてM-GTAの手法を援用して行ったものである。ただ，手記データについて主観を外して演繹的に分析することが目的でもない。

「語り」の読み取りを通じて，研究者の「共同主観性」の関係で見ていくことについて，宮崎は，「われ―それ」から「われーなんじ」へと変化させることで，両者の相互作用として成立することを示し，「われ－なんじ」の「なんじ」をintersubjectivity（共同主観性）と捉え，文字テキストを共同主観的に理解できる（宮崎2010）[25]とする。

確かに語りの読み取りを研究者が行うときの共同主観性は重要な指摘であるが，滝沢の研究では，自身の手記であるので，研究者としての立場を生かしながらの「共同主観性」よりも一歩客観の方に退く必要があった。この点に関して，山崎のM-GTAの考え方についての言及が参考となる。山崎（2016:68）[26]は，「M-GTAでは，分析テーマの設定，分析焦点者の設定，データ範囲の方法論的限定，分析ワークシートの活用，という4つのガイドを設けることにより，研究者の主観的な思考や感覚を客観的に捉えつつ活かす営みを徹底して行う」ことの重要性を指摘する。さらに，「この『主観客観の関係での絶えまない往復』で徹底的に内容を繰り返し，特定のテーマについて関心を共有する他者と自分自身にとって，オリジナルかつ説得的な理論を産み出すために重要である」としている。

滝沢の研究事例では，ある時は手記の体験の「主観」に戻って着目し，ある時は「客観」に戻って分析するという意味から「主観客観の往還」により分析することが重要であった。自らの手記データであってもデータとの距離を取ることで分析を可能としたのである。

一方で，この研究事例ではM-GTAの本来の研究デザインには見られない理論的サンプリングとなっている。また，多くの伝記や歴史書物は本人の手によるものではなく，第三者の手を通したものであるため，手記という本人自身の記述とはかけ離れていることも考慮する必要がある。しかしながら，手記や伝記等のなかには，その人やその周りの人しか知り得なかったことも多く存在する。そこを丁寧に読み取って，解釈し，鍵概念を生成し，そこに当事者の手記を加えて分析することで，より当事者の生活に迫った解釈を行うことが可能となり，実践から理論への橋渡しとなるのではないかと思われる。

M-GTA本来からはややイレギュラーな方法ではるが，創始者たちの営みの中から出てきた鍵概念は，見事に滝沢手記にフィットしたのである。先に鍵概念を生成し，後で手記をその鍵概念に加えて分析したということも功を奏したのではないか。つまり，手記の書き手の視点は重視しながらも，少し距離をもって文献データや手記データと向き合うことで，恣意的な分析へ流されることがなかったのではないかと考えられる。M-GTAの研究法の「主観客観の往還」は，互いのデータについての深い解釈を呼び，理論的飽和化まで継続的比較分析を行っていく。可能な限りの「主観客観の往還」は，自分の手記との追体験となる。また，このような手記の筆者が「研究する人間」となることを可能とする。

分析は，「時に解析といわれ，ギリシャ語のもつれなどを解きほぐす，還元する，帰るなど

を意味するアナリュシス（analysis）と一緒におく，組み立てる，整える等の意味シュンテシス（synthesis）という二つの意味の語源をもつ」（佐々木力 1998：1428）[27]。このことから，一般的に，analysis は演繹的，synthesis は仮説生成のアブダクションと対比して解釈される。ところが，この二者の関係は対比関係ではなく，「通常のアナリシスの行為にも論理的な意味でのシンセシスを行う部分があり，またシンセシスの行為にも論理的な意味でのアナリシスを行う部分がある（武田・吉岡・冨山 2001）[28]」とする。「主観客観の往還」で行う研究は，調べる analysis と作り出す synthesis の双方をもつ研究となる。

「M-GTA は，客観主義ではなく，実践主義に基盤を置き，分析を grounded-on-data の原則と経験的実証性（データ化と感覚的理解）によって進めて理論形成をめざすので，主観的作業と客観的作業の両面が組み込まれている」さらに，作業レベルでの帰納的発想と演繹的発想の組み合わせによって解釈を活性化できる」（木下 2020：71）のである。

木下が実践への応用ということを強調するとき，それはその研究がその人自身の研究から発せられたとしても，そこでとどまるのではなく，真にそれを必要とする応用する人間（エンドユーザー）を重視しているということである。

当事者が何を考え，どのように時を過ごしておられるのか，福祉の研究者はそこに肉薄したいのである。

6. 本研究のまとめと残された課題

太田は，江戸時代の全盲の学者「塙保己一」が群書類従の編纂を思い立ったのは，「散逸してしまう日本の貴重な文献を記録し，歴史をただ記録するのではなく，その時，その場で生きた人々が伝えたかった思いを記しておくことが必要と考えたからではないか」と述べる（1988：61-62）[29]。また，音訳者という存在との相互作用がなければ塙の大事業もまた成しえなかった（眞砂 2001）[30]のである。このように考えると，過去の人びとの営みを分析し，人と人との相互作用から概念を生成しながら，現代のテーマに果敢に挑んでいき，新たなものを創り出すことも可能であると考える。

中嶌（2013）[31]も「社会福祉実践は，日々新たな問題に直面し，あるいは利用者を前に，新しいことに挑戦していかなければならない」のであり，「そうした新たな問題への対処方法や新規事業のヒントは，目先の結果に一喜一憂する研究ではなく，歴史のなかに見つかる場合も多い」。さらに，「原点研究という物事の根幹や本質にアプローチしようとする視点を持つことも重要である」と述べる。

手記とは，「①自分で記すこと。また，そのもの。自筆。自書。②体験したことなどを，自ら書き綴ったもの（広辞苑）[32]」であり，何かのテーマに沿って他者に書かされたものではなく，自らが主体的に記したものであるからこそ意味があり，質的データとして成立する。質的デー

タの分析についての佐藤の文献（2008）[33] では，手記をインタビュー記録やフィールドノーツなどとともに手記を文字テキストデータと捉え，分析することの重要性が述べられている。

社会福祉の実践の中で当事者やその家族などの生きた記録である手記を分析し，実践に役立つボトムアップ理論を生み出す可能性について検討してきた。滝沢氏の研究事例は，鍵概念をM-GTAで生成し，そこに演繹的方法を用いて手記を分析するという，ややイレギュラーな形の研究となったが, M-GTAという研究法を用い,「主観客観の往還」の分析により, インタビューの語りに匹敵する深い解釈が行え，ここから限定された範囲内ではあるが，当事者と支援者という二つの世界の間に流れる「営為の通奏低音」という一つの応用可能な福祉の実践理論を提案できたのである。

私家本は出版の形式をとらないため，それが貴重な記録であっても一般に周知されることが少なく，残されることがない。後世の人がその重要性に気がつくのは，その人の名前が知られている場合しかない。また，手記は，その人の考えを主観的に記録したものである以上，分析をその著者が行うことは難しい。しかし，そこに客観の視点を加えることで，分析が成り立つと考えられる。前出佐藤は，質的研究は,「『現場の言葉』を『理論の言葉』（ないし『学問の言葉』）へと移し替えていく」ことであり，その翻訳作業では，2つの意味世界のあいだを媒介する研究者の個人的な意味の世界が深くかかわってくる」（2008：27-28）と述べる。この二つの意味世界をつなぎ，研究論文となれば当事者の研究が公表されることになる。

本研究で検討してきたことは,「研究と理論と実践ということを考えれば，これは一つの『運動』のようなもの」とし,「社会運動って言いますか，このことは，研究って一体誰が何のためにするのか，研究する人の業績作りだけでは到底ないわけでして，やっぱりもう一回実践っていうか，現実の場面に戻って，そこで試されていくという，そこで改良されていくという，つまり当初立てた問題に対して，改良されていくっていうことは，段々と対応力も増していくということなんだと。そのプロセスに研究者と実践者が関わっていくという，終わりのないプロセスなんですけれども，やはりその研究のあり方としては，一つのこういう方法が提起できることではないかな」（木下ら 2017）という木下の言葉に凝縮されている。

社会福祉の研究者が行う研究は，誰のために何のために行う研究かということをもう一度考えてみたい。当事者自身の声をしっかりと聞き，そしてそこから深い解釈を行うために，研究者は自らの研究姿勢を改めて問い続けなければならないだろう。それは，当事者の現場に迫る立ち位置で，つまり主観として大事にすること，客観として大事にすることを行き来しつつ，何が起こっているのかということをリサーチクエスチョンで絶えず問いつづけ，人と人との関係の中で，何がどのように変化していくのか，その道程をしっかりと見極めることが重要である。研究に先立ち「明日それを必要とする人のために」という謙虚な研究者としての姿勢を改めて問い直したいと考える。

本研究では，M-GTAの「研究する人間」という基軸を方法論の中心に置き，主観客観の往還を通して，主観にぶれることなく手記データを分析する可能性について，ある程度検討できたと思う。ただ，本論文では，筆者が期待している当事者自身によるM-GTAを用いた研究という新たな道についての議論が十分に行えたとはいいがたい。また，非言語を主たるコミュニケーションとしている当事者の質的データをどのように扱い，分析するのかという点については別の課題として提起する必要がある。これらの点についても引き続き筆者らの課題として研究をすすめていきたいと考える。

〔注〕

(1) 筆者が佛教大学通信教育課程社会福祉学科本科生の1991年夏期スクーリングの際に，社会福祉方法論の川本俊永先生が黒板に書いてくださった言葉である。悩みながら力を貯えている今は明日の誰かにつながるという発言は，筆者の研究生活への大きな励みとなった。

(2) 筆者（眞砂）の立場は，社会福祉学研究科の大学院修士課程，博士後期課程の研究指導を行っているほか，西日本M-GTA研究会スーパーバイザー（以下SV），中四国M-GTA研究会会長兼SV，M-GTA合同研究会におけるSV（2018年9月信州大学，2022年9月Zoom開催）の他，M-GTAを用いた他分野の研究のSVをさせていただいている。他分野の研究例は，阪上由美・小西かおる（2017）「慢性期在宅療養者が潜在的ニーズを自覚するまでの訪問看護実践のプロセス」『日本地域看護学会誌』20（2）:20-28，Yoko Ueno, Mayumi Kako, Mitsuko Ohira and Hitoshi Okamura（2020）Shared decision-making for women facing an unplanned pregnancy: A qualitative study, Nursing ＆ Health Sciences, 22（4）, 1186-1196等

(3) 【木下康仁の文献】木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践　質的研究への誘い』弘文堂，木下康仁（2005）『分野別実践編 グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂，木下康仁（2007a）『ライブ講義M-GTA実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂，木下康仁（2009）『質的研究と記述の厚み―M‐GTA・事例・エスノグラフィー（グラウンデッド・セオリー・アプローチ）』,『木下康仁（2020）『定本M-GTA』医学書院, 木下康仁（2007b）「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析技法」『富山大学看護学会誌』6（2）：1-10，木下康仁（2011）「質的研究は研究する人間をエンパワーできるか－グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）の多様化をとおして－」『日本看護研究学会雑誌』34（3）:92-93，木下康仁（2016）「M-GTAの基本特性と分析方法－質的研究の可能性を確認する－」『順天堂大学医療看護学部医療看護研究』13（1）:1-11，木下康仁（2020）「M-GTAの集大成とさらなる進化」『看護研究』53（7）:528-549，【山崎浩司の文献】山崎浩司（2016）「5章M-GTAの考え方と実際」57－69，末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之編『「主観性を科学する」質的研究法入門』金子書房，山崎浩司（2019）「3－2　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編『質的研究法マッピング』108-115

(4) 木下康仁・根本愛子・中井好男・牛窪隆太（2017）「経験から編み直す言語文化教育ポリティクスM-GTAを例として」『言語文化教育研究』15：26-57　この制御については，牛窪は「教師の自分が教師の研究をしていると，自分の教師としての思いが非常に暴走することがある」「その思いを制御する強みが，M-GTAには揃っている」としている。

(5) GTAのオリジナル版については，Glaser, B. & Strauss, A.（1967）/ 木下康仁訳（1988）『死のアウェアネス理論と看護－死の認識と終末期ケア』医学書院，オリジナル版を含む各GTAについては，木下康仁（2014）『グラウンデッド・セオリー論（現代社会学ライブラリー17）』弘文堂を参照してほしい。

⑹ GTA の認識論や分析方法の違いについて，社会福祉学では，山野則子（2009）『子ども虐待を防ぐ市町村ネットワークとソーシャルワーク』明石書店，「研究目的と研究の枠組み」のなかで，GTA の認識論や方法の違いを整理し，M-GTA を採択した理由が詳細に述べられている。

⑺ Charmaz の GTA を用いた Smith R. S.& Sharp J.（2013）Fascination and isolation: a grounded theory exploration of unusual sensory experiences in adults with Asperger syndrome, Journal of Autism and Developmental Disorders, 43（4）, 891-910 の研究結果から理論を見出すことは難しく，この分析結果のコードとカテゴリーを用いて Miller L.J.（2014）, Sensational Kids TarcherPerigee にある事例について演繹的分析を行った。眞砂照美（2015）「発達障がいをもつ人の異感覚体験が社会生活に及ぼす影響」『医療福祉学』11：53-62

⑻ 木下ら（2017）前掲論文　中井好男は，理論化するときに文脈を残せる意味を強調する。

⑼ 木下ら（2017）前掲論文

⑽ 眞砂照美（2010）「てんかん相談におけるワーカー・クライエントの双方向エンパワメントプロセス」九州保健福祉大学大学院社会福祉学研究科博士論文，科学研究費補助金（2007 年度－ 2008 年度）基盤研究（C）「てんかんをもつ人への臨床ソーシャルワークに関する研究」https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-19530544/19530544seika.pdf，眞砂照美（2016）「てんかんの人への臨床ソーシャルワーク：てんかん相談におけるワーカー・クライエントの双方向エンパワメントプロセス」『社会福祉科学研究』5：153-162

⑾ この研究の SV は山崎浩司先生（現静岡社会健康医学大学院大学教授）で，分析ワークシートを作成するときの手順や考え方，理論的メモの重要性について丁寧に教えていただいた。初学の研究者の研究の良いところをほめて励ましながら，重要な部分はやさしく指摘された。当時は東京大学大学院人文社会系研究科におられた。筆者と同じく M-GTA を用いた研究『被爆者を援助し続ける医療ソーシャルワーカーたち』の佛教大学の黒岩晴子教授と一緒に東大のキャンパスで SV を受けたのは懐かしい思い出である。

⑿ 山崎浩司（2011）「質的研究の技術 1 －基本編」『日本認知症ケア学会誌』10（1）：106-113

⒀ 糸賀一雄（1968）『福祉の思想』NHK 出版

⒁ 中嶌洋（2013）「社会福祉研究における歴史的アプローチの特徴と課題－ホームヘルプ事業の先覚者，原崎秀司の記録物の探求を事例として－」『帝京平成大学紀要』24（2）：289－304

⒂ 日本知的障害者福祉協会編（2013）『天地を拓く』日本知的障害者福祉協会　これは，知的障害者福祉協会月刊誌『サポート』の 2008 年 5 月号から 11 回にわたって連載されたシリーズ「セミナー知的障害福祉を築いてきた人物伝」に加筆したものである。また，福祉施設の実際に目を配った内容となっている（「監修に当たって」）。

⒃ 『天地を拓く』から，当時の事情に詳しい後継者等の情報を含め本書以外の文献資料を得やすい 5 名を抽出した。社会福祉法人六方学園の田中久喜理事長はその一人である。この場をお借りして，お礼を申し上げたい。

⒄ 田ケ谷雅夫「菅修－知的障害者治療教育に尽くした障害」，日本知的障害者福祉協会編（2013）『天地を拓く』日本知的障害者福祉協会

⒅ デジタル大辞泉　小学館　EX-word　DATAPLUS4

⒆ 田ケ谷雅夫（2012）『福祉のこころ：私の「白鳥の歌」』中央法規出版

⒇ 河尾豊司（2006）「学術支援の監修について」山田火砂子･車取ウキヨ『筆子　その愛』ジャパン･アート出版

㉑ 津曲祐次（2013）「石井亮一　日本の知的障害者教育･福祉の創始者－」日本知的障害者福祉協会編『天地を拓く』日本知的障害者福祉協会

㉒ 西尾祐吾・塚口伍喜夫（2018）『歴史との対話』大学教育出版

㉓ 村井龍治「田中正雄　誓いと「六方」にかけた想い」日本知的障害者福祉協会編（2013）前掲書

⑵④ 手記を分析した福祉の研究では，口村淳（2014）「要介護高齢者からみたショートステイの意義と課題－ある利用者の手記（手紙）の質的分析－」『社会福祉学』55（3）:94－105　等少数にとどまっている。
⑵⑤ 宮崎至恵（2010）「質的研究における共同主観に関する考察～「語り」の読み取りを通じて」九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻　修士論文，宮崎は，「われ―それ」から「われーなんじ」へと変化させることで，両者の相互作用として成立することを示し，「われ－なんじ」の「なんじ」をintersubjectivity（共同主観性）と捉え，文字テキストを共同主観的に理解できることを調査により明らかにしている。
https://www.hues.kyushu-u.ac.jp/education/student/pdf/2010/2HE09065K.pdf（2019年9月24日取得）
⑵⑥ 山崎（2016）前掲書
⑵⑦ 岩波哲学・思想事典（1998:1428）「分析」
⑵⑧ 武田英明・吉岡真治・冨山哲男（2001）「シンセシスの推論フレームワークに関する研究（第1報）－シンセシスのモデル化－」The 15th Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence
https://www.jstage.jst.go.jp/article/pjsai/JSAI01/0/JSAI01_0_30/_article（2022年10月17日取得）
⑵⑨ 太田善磨（1988）『塙保己一』吉川弘文館
⑶⓪ 眞砂照美（2001）「視覚障害者の学習支援の可能性について－音訳活動からの考察を中心として－」『佛教大学大学院紀要』29：175-191
⑶① 中嶌洋（2013）「社会福祉研究における歴史的アプローチの特徴と課題－ホームヘルプ事業の先覚者，原崎秀司の記録物の探究を事例として－」『帝京平成大学紀要』24（2）：289－304
⑶② 広辞苑　第五版　Ex-word
⑶③ 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法』新曜社

（まさご　てるみ　社会福祉学科）
（たきざわ　ゆきこ）
2022年11月15日受理